

倫理法人会に入会して学ぼううちに、夫婦関係の大切さを痛感する経営者も少なくありません。家庭の有り様が、目に見えないところで事業に影響を及ぼすからです。

ホテルの責任者であるKさんは、数年前、妻との離婚を決意しました。妻の行動や口の悪さに愛想がつき、離婚届を妻に渡し、後は捺印して返してもらっただけでした。

「最後だから…」ということで妻から貰った手紙の中に、これまで言えなかったことがたくさん盛り込まれており、いよいよ二人の関係は修復不可能と判断しました。

そんな矢先、Kさんの両親が心配して様子を見に泊まりに来て、帰る日に手紙を手渡されたのです。その内容を目にし、Kさんは愕然としました。

「この十日間ほど、老夫婦ともども心が重く気が晴れない」「これが一家の戸長として、まともに責任を果たしてきたといえるのか」「妻の心情を正しく理解し対応する力はお前にはなかったのか」「もう一回初心に戻って出直してほしい。意思の疎通を洗い直せ。そういう努力をするのが、このような事態になつたことを修復する、お前自身の責任である」

そして最後に、「二人の子供の心に決して暗い陰を落とすようなことをしてはならぬ」と締めくくられていたのです。

Kさんは我に返りました。自分のことだけしか考えず、物事を独断専行で勝手に決めて進めようと、両親や二人の子供のことを気遣う余裕もない自分だったのです。妻ばかりを悪者にし、「俺に非があれば言ってみる！」とまで言い放っていたKさんで



妻あつての自分と意思の疎通を図る

したが、自分は一家の主として何の手立てもしていなかったことを猛省しました。

数日後、最後の荷造りのために自宅に立ち寄る妻に置手紙をしておきました。「もう一度やりなおさないか」と。Kさんが家に帰ると、妻がまだ居ました。手紙を読んだ妻は「出て行かなくていいの？」と尋ねました。よくよく考えてみると、帰る場所さえ無い妻です。切れていた絆がつながり始めた瞬間でした。

倫理研究所の創設者・丸山敏雄は「夫の倫理」の中で次のように述べています。

今いちど結婚当時にかえって、妻の欠点、くせ、目につくものなど、いっさいをタナにあげて、静かに、果して自分にはそうした欠点はないか、妻ばかりに要求して困らせたことはないか、自分だけが「横座弁慶」(家の中だけで威張っていること)でえらそうにしているのではないかと反省を深めていくと、妻なればこそ、これまでしんぼうしてくれた、妻のおかげで今日の私がある。と、己れをかえりみたと、昨日までは世にまたなき悪妻が、今日は天下にただひとりの良き妻となる。(『丸山敏雄全集』第四巻四五頁～四五六頁)

もし両親から厳しく気づかされなければ、今頃どうなっていたのかゾツとするとKさんは迷懐しています。

相手を直そうとするのではなく、自分が変わるうと決心したKさんは、妻にねぎらいの言葉をかけられるようになり、子供たちも以前に比べると少しづつ明るく変わってきました。家族の絆を深めるKさんの実践は、まだまだ続きます。